授業名　　学籍番号
予備調査２

大学院のゼミにおける、非言語表現―「身振り」と「視線」に着目

日付　S09（アルファベット・カナ表記）

1. はじめに

談話分析の中で、一つの分野は非言語表現である。つまり、談話のときには、非言語の表現が、言葉を使わずに、あるいは発話に伴って使われた。ヴァージニア・P. リッチモンド等（2006）によると非言語メッセージは、「外見的特徴、ジェスチャと動作（筆者：身振り[1]）、表情と視線行動、音声行動、空間、接触（p. 12）」六つに分類できる。

この論文は非言語表現の身振りと視線に着目し、大学院のゼミの談話の中で、説明するときに、どのような非言語表現を使うのかを明らかにすることである。

留学生教育にとって、大学院のゼミの談話を分析することに通して、留学生たちがゼミなどの多人数の談話での方法を身につける、というメリットがある。特に多人数の相手に説明するときに、内容を聞き手にわかりやすいために、非言語表現がどんな役割を果たすのか、そしてそのため、どんな表現が選ばれるか。この問題が答えられれば、日本語学習者は多人数の談話での自然な身振りを知るため、ゼミだけではなく、たいてい会議でもより参加しやすくなるであろう。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

大学院のゼミの談話における非言語表現について扱った研究には、ザトラウスキ（2002，2010）や西尾（1997）などがある。

まず、ザトラウスキポリー（2002）は、日本人とアメリカ人を被験者をし、セリフがないアニメーションを見させるから、母語と非母語の言語（日本語と英語）でそのアニメーションの内容を語ってもらい、その結果を分析した。

次に、ザトラウスキポリー（2010）は、授業を対象に講義者はどのような時に身振りを用いるのかという問題について、身振りを七種類に分かれ、講義者の台詞と身振りを文字で併せて記録することで、分析するという内容であった。

そして、西尾新（1997）は、研究の背景として、身振りの①情報を反映する、②発話に詰まった状態にも語彙アクセスを容易にしているという性質を紹介し、そして、表記規則を知らせし、最後に、その表記を用いてからの発見と表記法の問題を挙げた。

しかし、大学院のゼミの談話を対象に、説明の仕方という観点から扱った研究はない。そこで、私は多人数の談話に用いている非言語表現で分析を行うことにしたい。

この分析で、非言語行動がどのように内容の伝達に支えるかと明らかになり、身振りが多人数の談話でどんな役割があるかということが解明し、日本語教育に良いと考えている。

3. 研究の資料と分析の方法

---

[1] ここの「身振り」は、手、腕などの動き。姿勢、胴体身体動作（曲げたり、歩いたり）と定義する。

研究の資料は、2015 年 9 月に、神奈川県の三浦半島のホテルで行われた都内の大学院の某ゼミマールの二つの 40 分程度の談話である。

一つは、絵本を日本語の読解クラスのテキストにするという内容が発表したあと、発表者と質問者ＡＢと先生の討論のビデオであった。

もう一つは、日本語学習者が日本語の論文を書くときに悩むことをアンケートしたあと、各々の因子について討論するというビデオであった。

そして、そのビデオ資料から非言語表現観点からデータを抽出し、多人数の談話の時の説明の仕方によって分析を行った。分析の表記法については、西尾（1997）の方法を参考し、身振りを記録する。身振りの機能はヴァージニア・P. リッチモンド等（2006）による「補完、矛盾、強調、反復、調節、置換（p.11）」を仮設し分析を行うが、この六つの分類の枠に含まれない表現がある場合、後文に討論する。

4. 分析の結果

１）身振りがよく使われるとき：

① 話者は自分の感情を表すとき：「あとは、平均値を求めて、次にあのうー」｛顎を触る｝のように、台詞がまだ終わっていないうち、次の内容を考えていた。

② 話者は抽象の概念を説明するとき：「男性と女性とか？｛両手でバランスのように｝」と二つの相対な分類でデータを分析する方法を提案することき概念の関係性を具現化する。あるいは「不安」という単語を言うと手か震え、不安の様子をする。

③ 話者は強調するとき：話段に三回も「共通因子」と言ったとき、両手で括弧の形をかくという同じ身振りをする。

④ 身振りを言葉と同じ情報を伝えるとき：「っと思って」｛両手のひらを合わせ、視線が机に向く｝

２）手の身振りが行われる位置

西谷（1997）による、身振りがよく行われる位置は上半身で体軀の前面の空間であり、それを上下左右それぞれ三分割し、９つに区切った。上から下は（UP：MD：LW）で、左から右は（LS：CE：RS）である。ゼミの中の手の身振りは、ほとんど（MD,CE）という、胸の前に行われる。

３）頻繁に頷く

一人の話者だけではなく、ビデオの中の参加者は頻繁に頷いた。

「命名は、その研究者自身が、本人が命名しえいいと思うんですけど、…」

「表現の産出とか（相手の人：とか）…」

「で、さらにこれから、ま、回収して（相手の人：はい）いくー。ところで…」

「これからは、あのー、特に、あのー、あとは…」

さらに、視線が合って頷きと、合わずに自分で頷きと、二つの種類があった。

5.　実行の問題点

① 話し手が気づいていない身振りを分析するということが意味があるか。つまり、分析したあと、実際に教えるなどの応用はできるか。

② 身振りを使ったのは、使わなかったより分かりやすいという判断がしにくい。

③ 人によって身振りをたくさん使う人がいるが、あまり使わない人もいる。そうすると、最後によく使う人をしか対象にし分析を行い、分析の結果が歪んでいるという恐れがある。

参考文献

西尾新（1997）「発話に伴う身振りの表記法作成の試み」『京都大学教育学部紀要』43 pp. 149－160

ザトラウスキポリー（2002）「日米におけるアニメーションのストーリー語り方と非言語行動の相違」水谷修　李徳奉編『総合的日本語教育を求めて』国書刊行会　pp. 187－201

ザトラウスキポリー（2010）「講義の談話の非言語行動」佐久間まゆみ『講義の談話の表現と理解』くろしお出版　pp. 287－204

ヴァージニア・P. リッチモンド , ジェイムズ・C. マクロスキー（2006）『非言語行動の心理学―対人関係とコミュニケーション理解のために』北大路書房